

「発達心理学研究」の審査に関するアンケート調査 報告書

日本発達心理学会第 32 回大会プログラム委員
発達心理学研究副編集委員長
伊藤大幸

目次

1. 調査の概要	3
A. 目的	3
B. 調査主体	3
C. 調査対象	3
D. 調査方法	3
E. 調査期間	3
F. 調査項目数	3
G. 回答者数	3
2. 回答者の属性	4
A. 年齢	4
B. 主たる専門分野	4
C. 国内誌（査読つき）の掲載論文数	4
D. 国際誌（査読つき）の掲載論文数	5
E. 旧審査システムにおける「発達心理学研究」の掲載論文数	5
F. 現行審査システムにおける「発達心理学研究」の掲載論文数	5
G. 旧審査システムにおける「発達心理学研究」の査読担当回数	6
H. 旧審査システムにおける「発達心理学研究」の編集委員経験	6
I. 現行審査システムにおける「発達心理学研究」の査読担当回数	6
J. 現行審査システムにおける「発達心理学研究」の編集委員経験	7
3. 本誌の査読に対する認識の集計	8
A. インパクト中心主義への賛否	8
B. インパクト中心主義の履行	9
C. インパクトの定義の必要性	10
D. インパクトの評価基準	11
E. 修正再審査の廃止への賛否	13
F. 採択率の水準への印象	14
G. 掲載不可判定への印象	15

H. 本誌の魅力	16
I. 魅力を高めるための提案	18
4. 項目間の関連性の分析	19
A. 項目間の相関	19
B. インパクト評価の予測（重回帰分析）	20
C. 本誌の査読に対する認識の予測（重回帰分析）	20
5. 総括	22
A. インパクト中心主義への賛否	22
B. インパクト中心主義の履行	22
C. インパクトの定義の必要性	23
D. インパクトの評価基準	24
E. 修正再審査の廃止への賛否	25
F. 採択率の水準への印象	26
G. 掲載不可判定への印象	27
H. 本誌の魅力	28
I. 魅力を高めるための提案	28
J. 今後の論点	29
引用文献	30

1. 調査の概要

A. 目的

日本発達心理学会第32回大会の大会委員会企画ラウンドテーブル「『発達心理学研究』における査読のあり方：インパクト中心主義について改めて考える」の開催にあたり、2008年度より導入された現行の審査システムについて、会員がどのような所感や見解をもっているのかを明らかにするため、アンケート調査を行った。この調査の結果をもとに現行システムの課題と論点を洗い出し、企画当日の建設的な議論につなげる。また、調査の結果は、発達心理学研究編集委員会において審査のあり方を議論していく上での資料としても有効に活用していく。

B. 調査主体

日本発達心理学会第32回大会委員会（委員長：氏家達夫）

C. 調査対象

日本発達心理学会の正会員、学生会員

D. 調査方法

Google フォームを使用して調査を実施した。会員への調査フォームの URL の配信は、研究情報ニュース（インターネット・ニュース）および会員メーリングリストを使用した。無記名での回答としたが、回答内容は会員に対して公開される可能性があるため、個人を特定しうる記述は避けるよう教示した。また、調査への回答は大会企画と今後の学会内での議論にのみ使用され、他の目的には使用されないことを明記した。

E. 調査期間

2021年2月1日（月）～2月19日（金）

F. 調査項目数

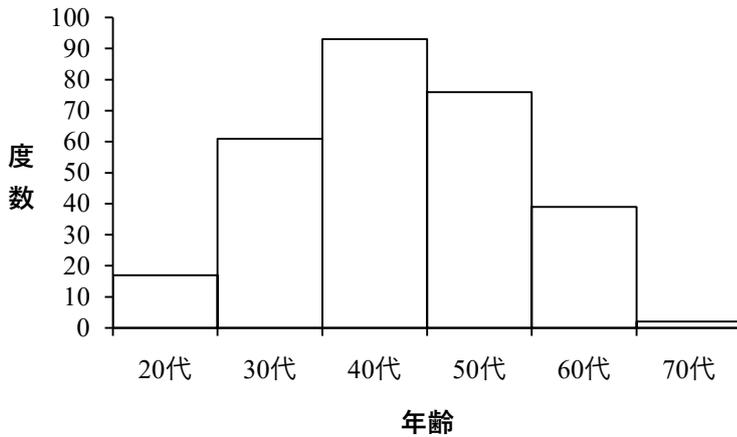
54項目（回答時間目安：10～30分程度）

G. 回答者数

288名（対象者4023名；回答率7.2%）

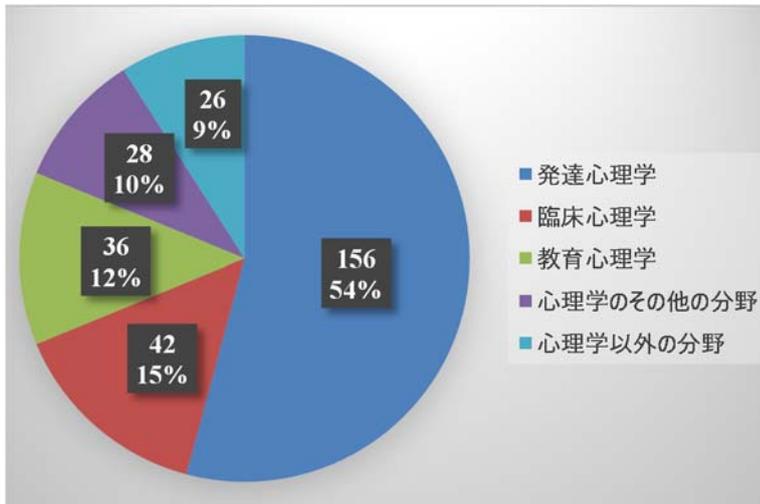
2. 回答者の属性

A. 年齢



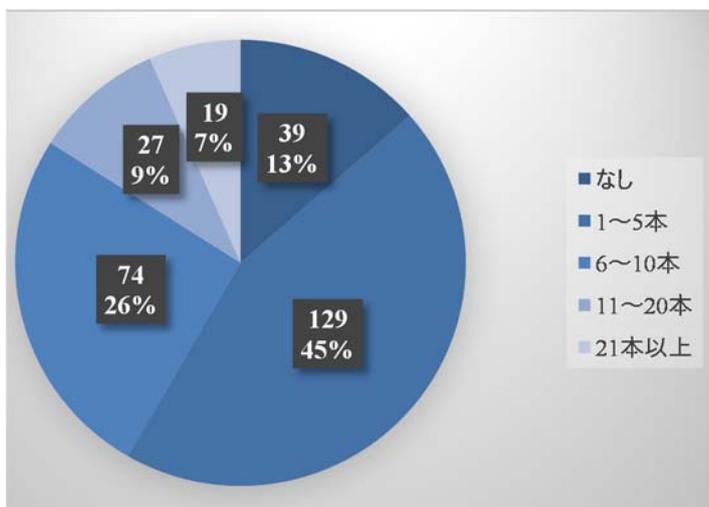
- ・40～50代を中心に、20～70代まで幅広い年代の会員（計288名）が回答

B. 主たる専門分野



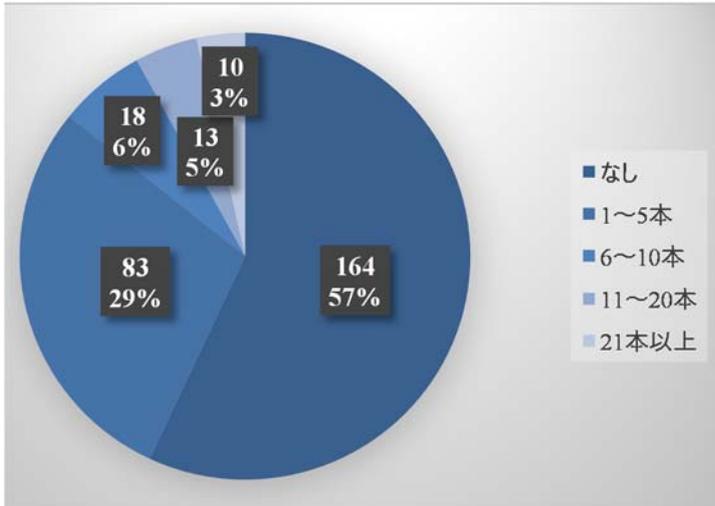
- ・発達心理学を主専門とする回答者が約半数を占めた
- ・発達心理学以外では、臨床心理学や教育心理学を主専門とする回答者が多かった

C. 国内誌（査読つき）の掲載論文数



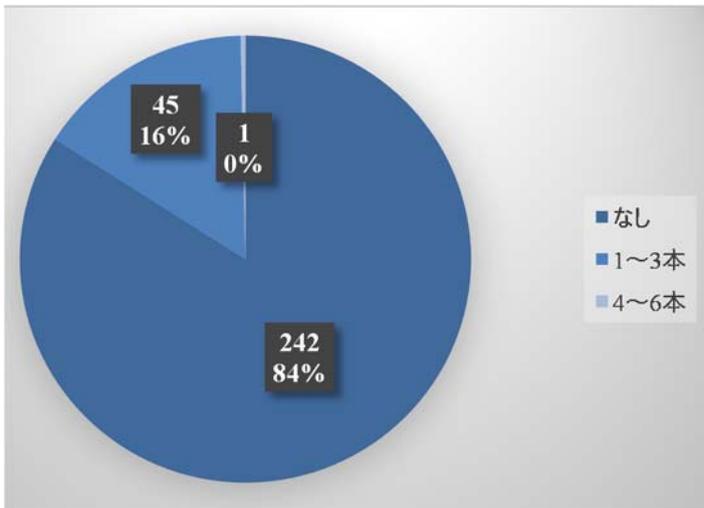
- ・「1～5本」が最も多かった
- ・11本以上の掲載論文を持つ回答者も46名（16%）

D. 国際誌（査読つき）の掲載論文数



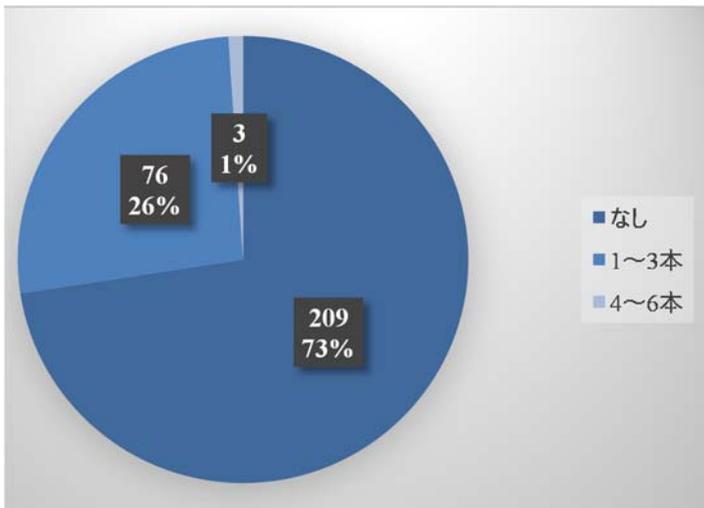
- ・「なし」が半数以上を占めた
- ・11本以上の掲載論文を持つ回答者も23名（8%）

E. 旧審査システムにおける「発達心理学研究」の掲載論文数



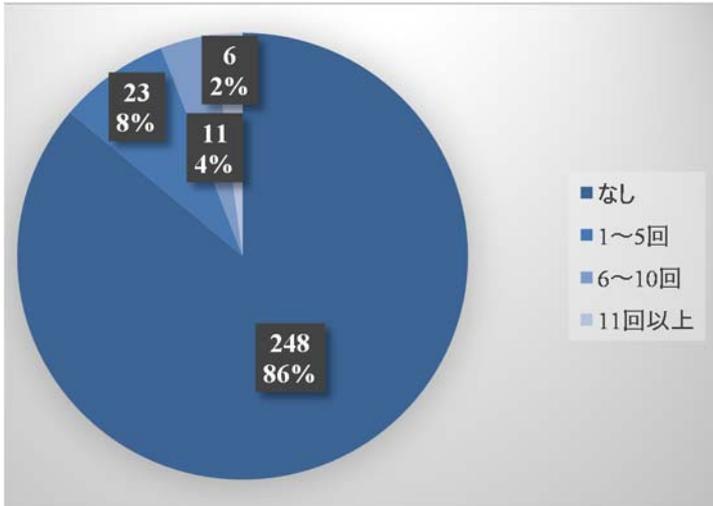
- ・旧審査システムでの掲載論文を持つ回答者は46名（16%）

F. 現行審査システムにおける「発達心理学研究」の掲載論文数



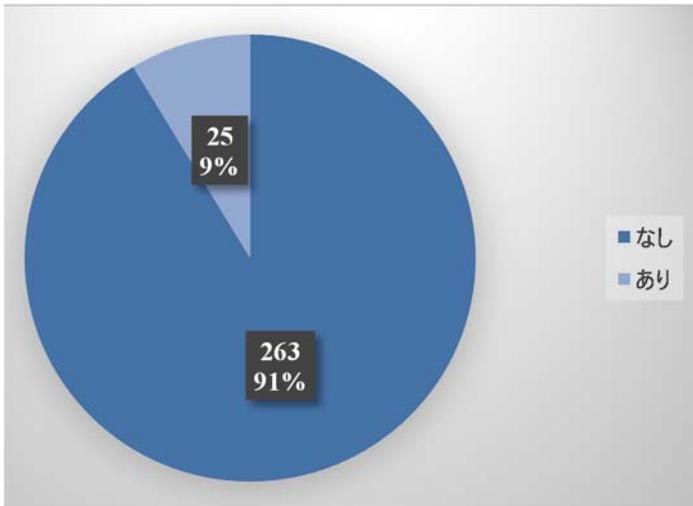
- ・現行審査システムでの掲載論文を持つ回答者は79名（27%）

G. 旧審査システムにおける「発達心理学研究」の査読担当回数



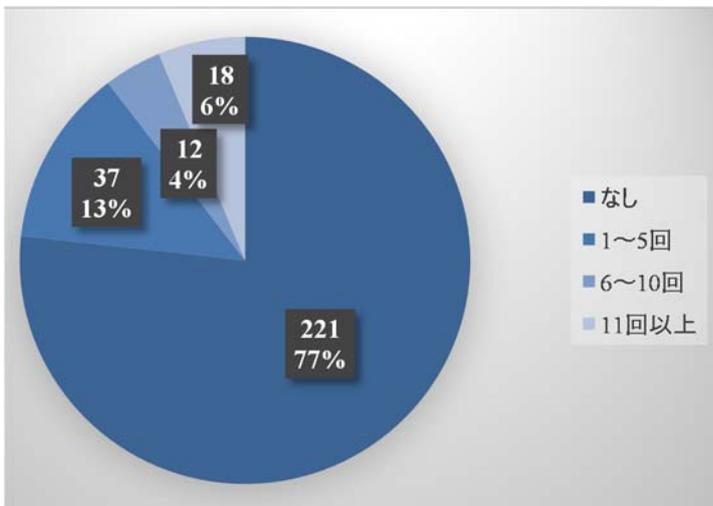
・旧審査システムで査読経験のある回答者は40名(14%)

H. 旧審査システムにおける「発達心理学研究」の編集委員経験



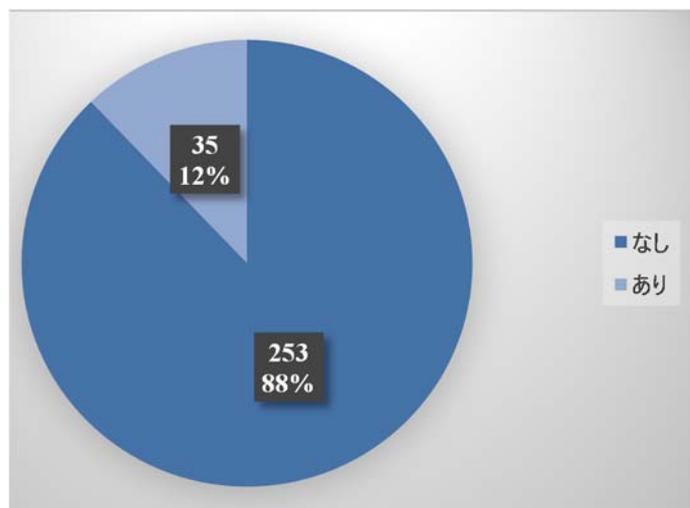
・旧審査システムで編集委員経験のある回答者は25名(9%)

I. 現行審査システムにおける「発達心理学研究」の査読担当回数



・現行審査システムで査読経験のある回答者は67名(23%)

J. 現行審査システムにおける「発達心理学研究」の編集委員経験



- ・ 現行審査システムで編集委員経験のある回答者は 35 名 (12%)

(次ページ以降に続く)

3. 本誌の査読に対する認識の集計

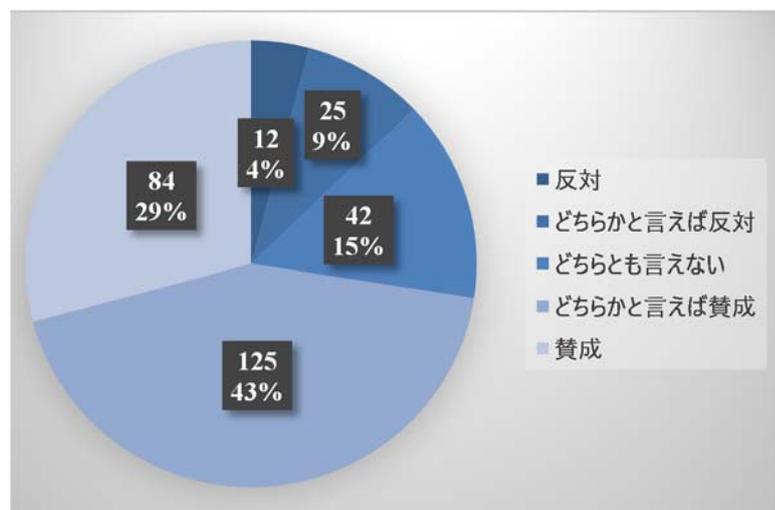
- ・ 現行の審査システムについて、以下の説明を提示した上で、A から I の質問に回答を求めた。

「発達心理学研究」では2008年度より現行の審査システムが導入されました。それ以前の旧システムでは、多くの投稿論文に「修正再審査」の判定が繰り返され、結果的に、インパクトのある論文よりも不備の少ない論文が採択される「無欠点主義」に陥りやすい状況がありました。こうした状況を変えるため、「インパクト中心主義」に基づく現行の審査システムが導入されました。旧システムからの主要な変更点は以下の2点です。

- (1) 論文の欠点の少なさよりも、論文の持つ**インパクト**（その論文がもつ、アイデアや方法、結果の重要性、新しさ、おもしろさ、その論文の試みの今後の発展可能性や新たな研究や議論を喚起する可能性）を積極的に評価する。
- (2) 「**修正再審査**」を**廃止**し、初回の審査から「掲載可（条件付採択含む）」または「掲載不可」の判定を行う。ただし、「掲載不可」になった場合も、修正を加えた上での再投稿は積極的に受け入れる。

A. インパクト中心主義への賛否

質問項目1：上記(1)の方針（欠点の少なさよりもインパクトを評価する）について、どのように考えますか？（方針に沿った審査が行われているかどうかではなく、方針そのものに対する賛否をお答えください）



- ・「賛成」または「どちらかと言えば賛成」が72%
- ・「反対」または「どちらかと言えば反対」が13%
- 全体として、インパクト中心主義そのものには賛成の考えを持つ回答者が大勢を占めた

質問項目2：そのように考える理由についてご記入ください

賛成の理由（代表的な意見）

- ・ 学問の発展や社会貢献につながりやすいため：79件（例：無欠点主義的な仕事ばかりでは、主張や新規な視点に乏しくなりやすく、他の領域への示唆や社会貢献につながりにくいと感ずるため）
- ・ 学会としての独自性を明確にするため：14件（例：研究の創造性を促す発達心理学会としての立ち位置を表すものとして、この方針には積極的意義があります。論文として欠点だけでは掲載できないのは当たり前ですが、何をより重視するかという点で見れば、多少の瑕疵があってもインパクトがあれば公刊を促すべきだと考えるからです。）
- ・ 無欠点主義よりも審査がスピーディになるため：9件（例：前の査読は、やや、あらさがし、のようで、審査に時間がかかりすぎた。）

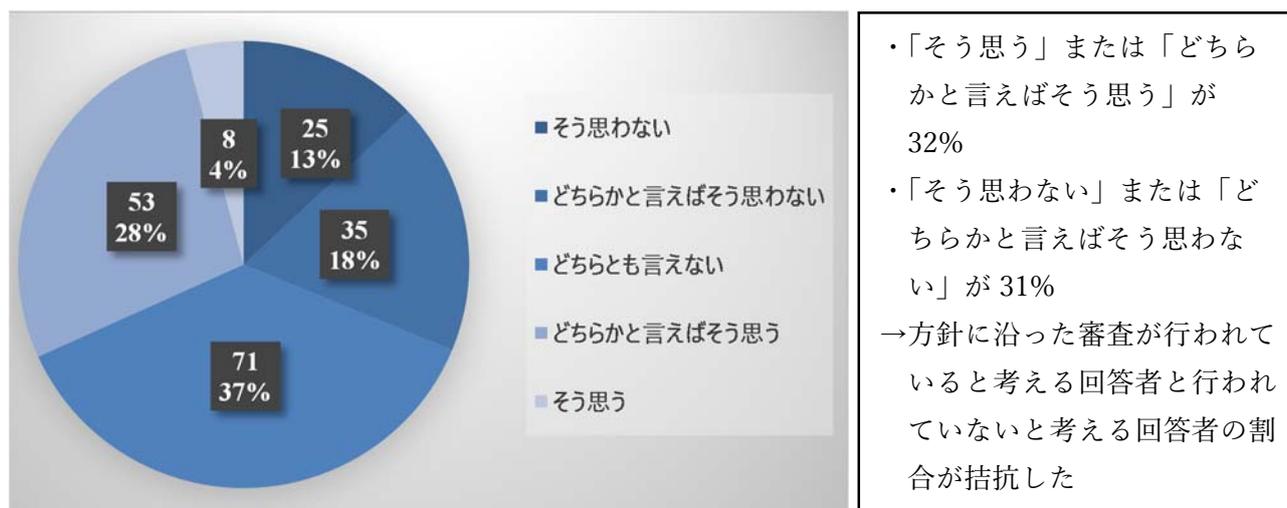
- ・他の雑誌でも一般的な考え方であるため：3件（例：「インパクト」を重要視することは他のジャーナルにおいても当然なされていることだと理解している。発達心理学研究もそれに倣うことは必要なことと考える。）

反対の理由（代表的な意見）

- ・インパクトの概念が曖昧で審査者によって評価基準が異なるため：14件（例：インパクトが明確に定義されていないので、投稿論文の評価基準が曖昧だから。）
- ・研究のクオリティが軽視される可能性があるため：13件（例：結果が重要で新しい発見であるように見えても、その結果に至るまでの客観性が担保されていなければ、「新しく」見えるだけで、意味はない。）
- ・地道な研究が評価されにくくなるため：5件（例：インパクトも大事と思われませんが、奇をてらう標題や地道さを嫌うことが、本来の研究の本質をそこねないか危惧いたします。）
- ・再現性が見直されている国際的な流れと逆行するため：4件（例：インパクト主義は、研究不正や再現されない研究を生む弊害が世界中で指摘されている。頑健な結果を評価するのが世界的な流れ。）

B. インパクト中心主義の履行

質問項目1：現在の「発達心理学研究」では、上記（1）の方針（欠点の少なさよりもインパクトを評価する）に沿った審査が行われていると思いますか？



※「現行システムで投稿や査読の経験がないのでわからない」（96名）はグラフに含めず

質問項目2：そのように考える理由についてご記入ください

方針に沿った審査が行われていると思う理由（代表的な意見）

- ・インパクトのある論文が掲載されているため：17件（例：ユニークな論文が多いし、読みたいものが多い。）
- ・インパクトを重視した査読が行われていると感じたため：9件（例：過去2回査読を受けましたが（一つは採択、もう一つは不採択）、編集委員の先生方からインパクトに照らしたコメントを頂きました。おおむね、方針に沿って適正に審査をして頂けたと実感しています。）

方針に沿った審査が行われていないと思う理由（代表的な意見）

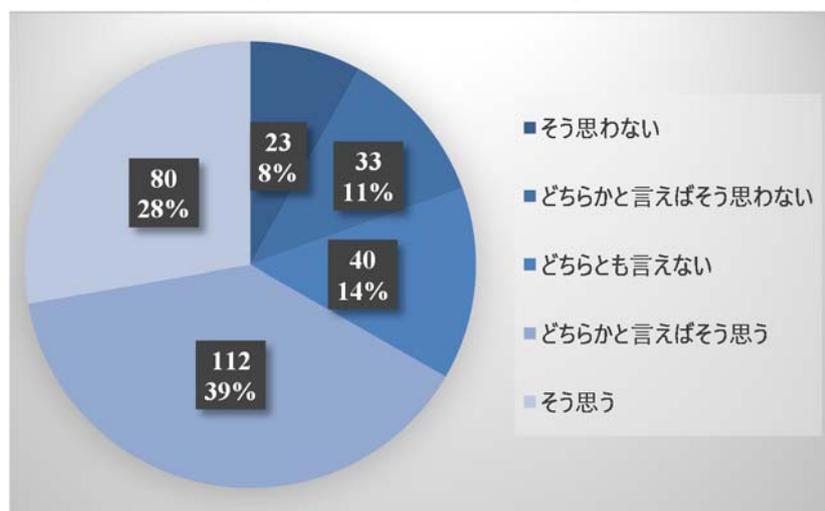
- ・インパクトよりも欠点を重視した査読が行われていると感じたため：17件（例：研究や論文には欠点や短所はつき物だが、投稿者としての経験から欠点ばかりを揚げ足をとるように指摘する査読がしば

しばある。)

- ・インパクトの概念が曖昧で審査者によって評価基準が異なるため：15件（例：査読者・担当編集委員によって「インパクト」と呼ぶものの内実がかなりぶれているため。査読者の違いによる審査のブレは当然あると思われるが、編集委員の間で「インパクト」と呼ぶものの中味にずれがあるのは、「インパクト」を重視すると言っているのにおかしいのではないか。）
- ・インパクトのある論文があまり掲載されていないため：10件（例：掲載されている論文を見れば一目瞭然であり、学術的なインパクトが大きく、多少の不備があるといったインパクト中心主義だからこそ通るような論文はなく、インパクトの少ない論文も依然として多く掲載されているため。）

C. インパクトの定義の必要性

質問項目1：上記(1)の方針の「インパクト」について、より具体的な定義が必要だと思いますか？



- ・「そう思う」または「どちらかと言えばそう思う」が67%
 - ・「そう思わない」または「どちらかと言えばそう思わない」が19%
- インパクトについてより具体的な定義が必要だと考える回答者が多数を占めた

質問項目2：そのように考える理由についてご記入ください

より具体的な定義が必要だと思う理由（代表的な意見）

- ・審査者による評価基準のブレや主観性を減らし、より客観的な評価を行うため：45件（例：何に重きを置くのかについてある程度定めておくと、査読プロセスにおける食い違いや評価の割れを防ぐことができると思います。）
- ・投稿者が研究や投稿を行う際の指針となるため：18件（例：投稿前に「これはインパクトがあるかないか？」と悩み、インパクトが大きくないなら別の雑誌に…となった経験があります。とはいえ、テーマは発達心理学で取り上げるべきものかと思いつつ…の判断でしたので、指標としての定義があると助かります。）
- ・研究のクオリティや再現性がインパクトの概念に含まれることを明確化するため：5件（例：追試であっても、再現性の問題が課題となっている昨今、インパクトは大きいと思う。しかし、査読者が必ずしもそういった意識を持っていないため。）
- ・審査者にとって定義が明確な方が審査しやすいため：4件（例：査読をしていても、インパクトが具体的に何を意味するかわかりづらく、難しいと感じる経験があったため。）

より具体的な定義が必要でないと思う理由（代表的な意見）

- ・研究の多様性や柔軟な審査を制限する可能性があるため：23件（例：具体的に定義し過ぎると、定義に縛られてしまい、却ってインパクトに欠ける恐れがある。）

- ・明確な定義は難しいと考えられるため：13件（例：それぞれの研究テーマの中で、何かのアドバンテージ、驚き、大きなステップが見られるかどうかであろうが、明確な定義は難しいように思う。）
- ・定義がなくても経験を積めば適切に評価できると考えるため：5件（例：研究者としてトレーニングを積み、適切に学位が授与され、研究者になった後も研究に勤しむことを保証された研究者であれば、感覚的に評価できるものだと思うため。）
- ・現在の説明で十分だと考えるため：4件（例：必要なことは書かれていると思います。）

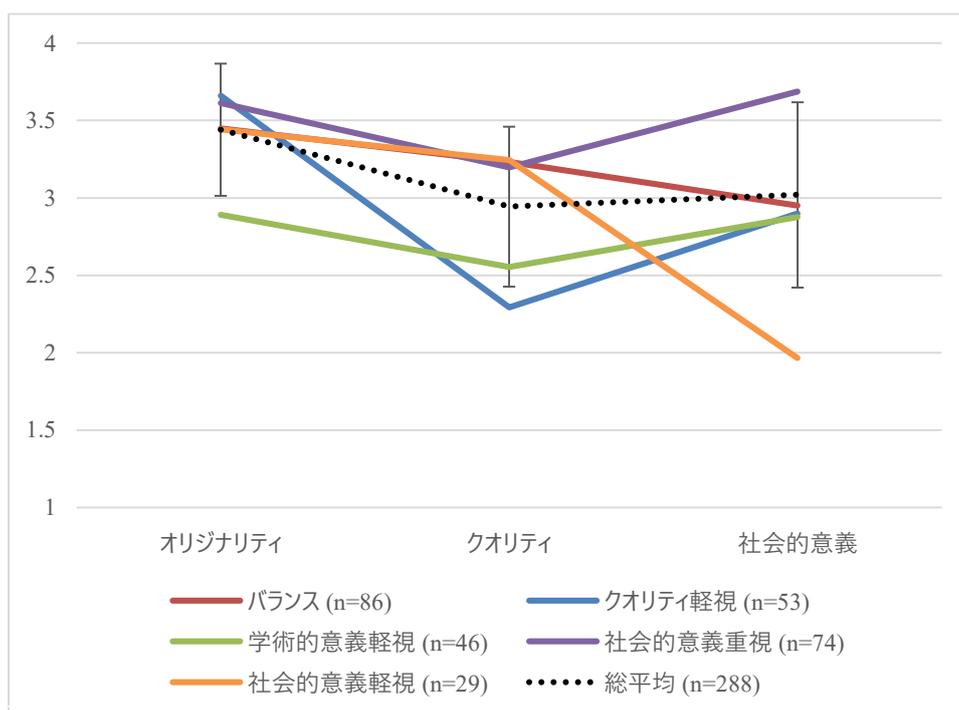
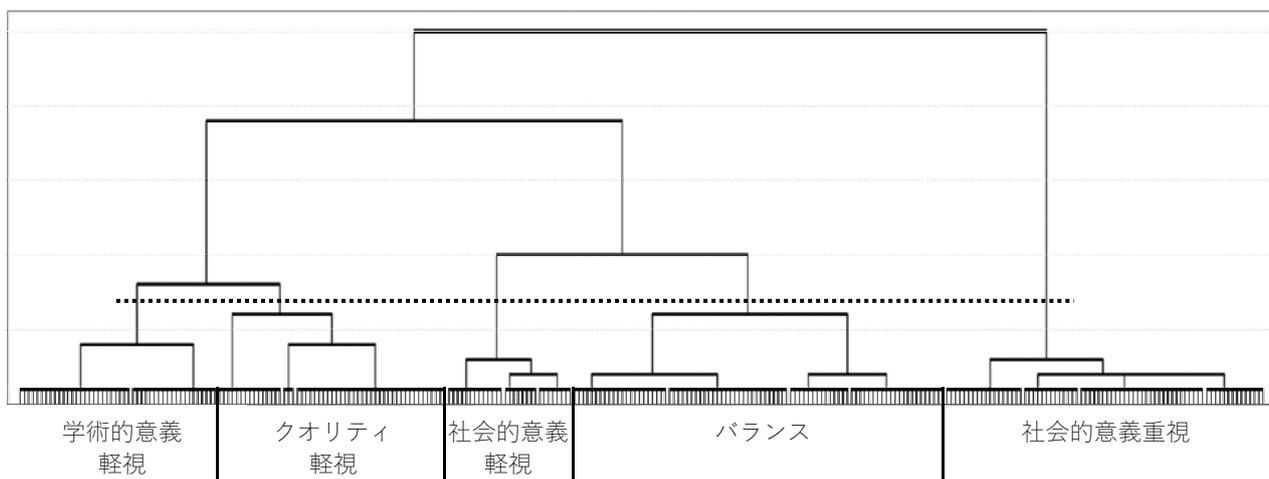
D. インパクトの評価基準

質問項目：論文の「インパクト」を評価する上で、以下の各項目がどの程度重要だと考えるかお答えください。

- ・研究のインパクト (research impact) に関するレビュー (Greenhalgh et al., 2016; Penfield et al., 2014) や国内外の学術誌の審査方針を参考に 28 項目を独自に作成。「重要でない」(1)、「あまり重要でない」(2)、「やや重要」(3)、「重要」(4) の 4 件法で回答を求めた。
- ・最尤法 (プロマックス回転) による因子分析を実施。スクリープロット (5.595、3.388、2.675、1.577、1.329、1.232、1.030、0.924…)、平行 MAP 分析、解釈可能性に基づき、3 因子解を採用。いずれの因子にも .40 以上の負荷を示さなかった 8 項目を除外。最終的な分析結果は下表の通り。

項目	因子負荷量			M	SD
	因子1	因子2	因子3		
クオリティ ($\omega=.834$)				2.94	0.52
科学研究としての完成度の高さ	.749	.028	-.077	2.77	0.80
研究の理論的基盤	.652	-.070	.050	3.11	0.76
研究方法上の欠陥のなさ	.652	.090	-.287	2.63	0.83
先行研究を踏まえた問題設定	.641	-.075	.003	3.04	0.77
結果の再現可能性	.561	.127	-.183	2.81	0.81
洗練された研究方法 (デザイン、測定、解析など)	.550	-.134	.242	2.91	0.80
論理展開の明快さや説得力	.530	.029	.077	3.15	0.76
科学的な知識体系の構築への寄与	.506	.033	.307	3.13	0.67
社会的意義 ($\omega=.836$)				3.02	0.60
社会的課題の解決への貢献	.038	.766	.089	3.12	0.77
実践 (臨床、教育、子育て支援など) への応用可能性	-.097	.746	-.022	3.05	0.83
社会的ニーズに即した問題設定	.048	.678	-.047	3.02	0.85
政策上の議論への貢献	-.022	.647	-.084	2.54	0.84
研究課題の社会的重要性	.022	.604	.012	3.40	0.76
実践者 (臨床家、教師など) にもたらす示唆やインスピレーション	.009	.593	.105	2.98	0.81
オリジナリティ ($\omega=.748$)				3.44	0.43
研究方法の斬新さ・ユニークさ	.055	-.078	.620	3.27	0.75
研究領域に変革をもたらす可能性	.023	.181	.612	3.28	0.70
新たな研究や議論を喚起する可能性	-.037	.158	.550	3.48	0.64
知見の新規性	-.068	.058	.547	3.39	0.65
アイデアや着眼点のおもしろさ	-.080	-.095	.544	3.69	0.51
研究課題のオリジナリティ	.111	-.100	.498	3.52	0.62
因子間相関					
	因子2	.108			
	因子3	.030	.182		

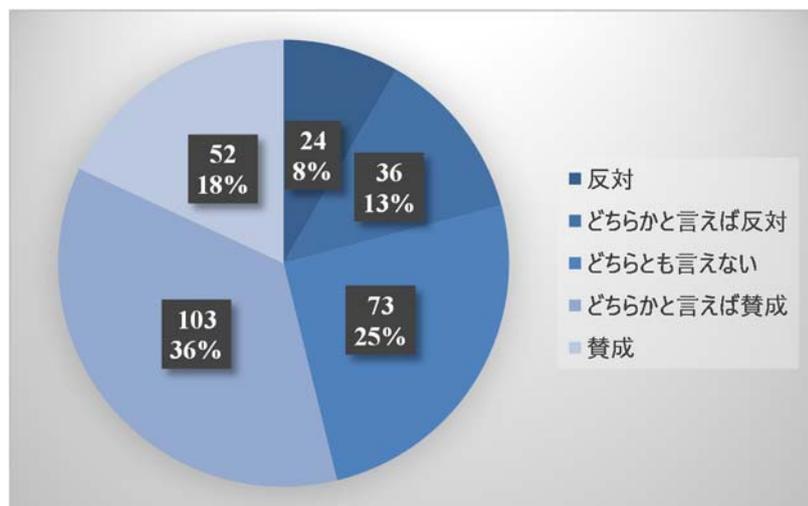
- ・項目内容に基づき、各因子を「クオリティ」、「社会的意義」、「オリジナリティ」と命名。因子間相関は.03~.18と低く、相互に独立性が高い。
- ・尺度得点（項目平均）の平均値は「オリジナリティ」が他2尺度よりも1SD程度高く、研究のインパクトとしてオリジナリティを想定する回答者が多かったことが推察される。しかし、他の2尺度の平均値も4件法で3前後の値を示しており、多くの回答者が重視する内容であることが示された。
- ・回答者によるインパクトの評価基準の異質性を評価するため、上記3つの尺度得点を使用し、Ward法・ユークリッド平方距離による階層的クラスター分析を実施。デンドログラム（下図上部）に基づき5クラスターを採用した。クラスターごとの各尺度得点の平均値は下図（下部）の通り。
- ・いずれの得点も平均的である「バランス」型、クオリティの得点のみが平均より顕著に低い「クオリティ軽視」型、学術的意義に関連するオリジナリティやクオリティの得点が顕著に低い「学術的意義軽視」型、社会的意義の得点が顕著に高い「社会的意義重視」型、社会的意義の得点が顕著に低い「社会的意義軽視」型が見出された。研究者が持つインパクトの評価基準は多様なパターンに分かれることが確認された。



※エラーバーは標準偏差

E. 修正再審査の廃止への賛否

質問項目 1：上記 (2) の方針（修正再審査の廃止と再投稿の積極的な受け入れ）について、どう考えますか？



・「賛成」または「どちらかと言えば賛成」が 54%
・「反対」または「どちらかと言えば反対」が 21%
→修正再審査の廃止に賛成する回答者が約半数を占めたが、反対意見も少なくない

質問項目 2：そのように考える理由についてご記入ください

賛成の理由（代表的な意見）

- ・審査の迅速化が可能になるため：23 件（例：投稿者側からすると、審査に時間が長くかかり、結果として不採択というケースが一番問題となる。主だった英文雑誌のように、スピーディに査読を進めるためには、はじめの段階である程度採否の方向を示すほうがよいのではないかと。）
- ・審査者の言うままに修正するよりも投稿者自身の視点で研究を見直しやすい：10 件（例：修正再審査だと、「査読コメントに対応して修正する」という作業になりがちです。不採択としていただいた方が、査読コメントに対応した修正に限らず、抜本的な修正やブラッシュアップもしやすいと思います。）
- ・意欲が維持・向上しやすいため：10 件（例：「修正再審査」が繰り返され、最終的にリジェクトされるというのは、モチベーションを多大に低下させるから。）
- ・審査者・投稿者の負担が軽減されるため：5 件（例：一回の修正再審査で採択となればよいが、修正再審査を繰り返すことになった場合、投稿者も査読者も疲弊する。）
- ・他の雑誌にはない特色であるため：3 件（例：発達心理学会としての今現在の立場は、他の学会にはないものなので継続しても良いのではないのでしょうか。）

反対の理由（代表的な意見）

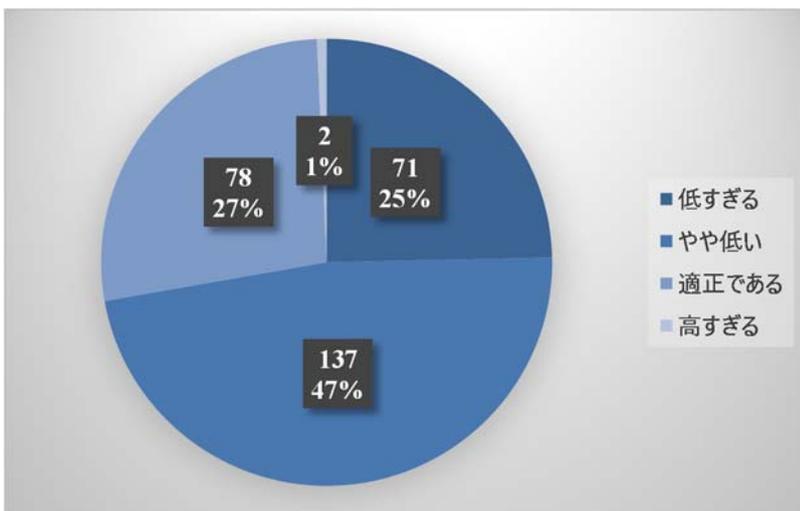
- ・修正再審査による論文の改良の機会がなくなるため：13 件（例：修正再審査の論文修正作業によって、論文が改良されていくプロセスは重要であると思う。時に、論文は審査委員からの参考意見や指摘によって、執筆者（投稿者）と審査委員との共同作業によって完成に近づいていく場合がある。）
- ・審査者にとって一度の審査で採否を決定するのは難しいため：9 件（例：「(修正) 採択」にする際に、必要な改稿ができる可能性に大きな「賭け」をしなければならなくなると感じました。）
- ・不採択の評価を受けることで投稿者の意欲が低下しやすいため：8 件（例：修正再審査が廃止されたことにより、不採択の結果を受け取った研究者（特に院生や若手）のモチベーションが低下し、再投稿する気を失ってしまうため。）
- ・再投稿で異なる審査者に指摘を受けることで対応に苦慮することがあるため：7 件（例：再投稿した際、査読者の先生が変わってしまい、一部修正前の論文内容でなければ採択できない（つまり、逆の）

指摘を受けてしまうことがあったため。)

- ・審査者や編集委員会の負担が増すため：5件（例：再投稿は修正せずにそのまま投稿することが多く、委員会の編集作業の大きな障害になっていた。）
- ・実質的に修正再審査と変わりがないため：5件（例：「掲載不可でも再投稿可」という説明があるが、それなら修正再審査にした方がよいと思う。）
- ・判断が不採択に偏りやすいため：3件（例：修正再審査になるはずの論文が、リジェクトにされる傾向が高まったように思われるため。）
- ・反論の機会が与えられないため：2件（例：再投稿の積極的な受け入れはよいと思うが、「不採択」は査読者や編集委員会からの指摘や意見に対する反論や説明の機会を投稿者から奪う点を考慮して欲しい。）
- ・修正再審査は世界に共通のシステムであるため：2件（例：欧米は一般に、修正再審査から始まります。修正による潜在的な可能性を試しているのだと思います。）

F. 採択率の水準への印象

質問項目1：「発達心理学研究」に投稿された論文の採択率（最終的に採択に至った論文の割合）は、旧システムでの平均が43%であったのに対し、現行システムでは導入直後の49%から年々低下し、2015年以降には20%前後で推移しています。この20%前後という近年の採択率の水準について、どう考えますか？



- ・「適正である」が27%
 - ・「低すぎる」または「やや低い」が72%
 - ・「高すぎる」が1%
- 現在の採択率の水準が低いと考える回答者が大勢を占めた

質問項目2：そのように考える理由についてご記入ください

適正であると考え理由（代表的な意見）

- ・投稿数や投稿論文の質が影響している可能性があるため：19件（例：採択率には、審査システムだけでなく、論文投稿数、投稿される論文の質も関係しているから。）
- ・採択率の数値だけでは判断できない：12件（例：単純な採択率だけでは適正ともそうでないともいえません。）
- ・掲載論文の質を保つには適正な水準と考えられるため：9件（例：発達心理学研究への投稿論文を、真摯に科学的な観点から審査すれば、この採択率に落ち着かざるを得ないように思われます。）
- ・修正再審査がなく、再投稿を受け入れていることを考えれば妥当な数値と考えられるため：5件（例：修正再審査がない現状の評価システムでは、少し厳しめになるのも仕方ないように思います。）

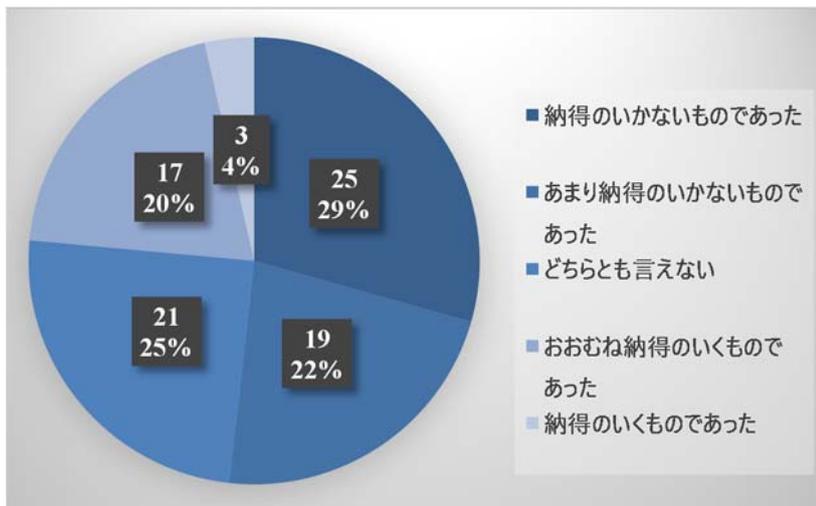
- ・他の雑誌と比べて特に低いとは思えないため：3件（例：2割という数字だけで見た場合、低いのかと思いましたが、国際的な論文で考えた場合、20%でも高い方だと知りました。）

低いと考える理由（代表的な意見）

- ・意欲の低下や投稿数の減少につながるため：20件（例：日本の雑誌の場合、採択率が下がれば投稿数も下がる傾向はあり、さらに質が低下するという悪循環に陥る可能性がある。）
- ・インパクトではなく欠点で評価していると考えられるため：13件（例：査読者によっては、データの価値等を軽視し、無理難題を述べてくる。査読者自身が、査読にもとづいた研究をできるのか、されているのかと疑問に残るケースもある。）
- ・以前の水準に比べて低下しているため：6件（例：49%が20%になっているので、減っていると思いました。）
- ・投稿者と審査者の間でイメージのズレがあると考えられるため：5件（例：『インパクト』に対して、寄稿者と査読者とで考えの違いがあって通過率低下に繋がっているなら、問題かと思う。）
- ・学問の維持・発展を妨げるため：5件（例：学会や学問領域としての知識ベースの脆弱さにつながる危険があるためです。）
- ・国内の他の雑誌に比べて低いため：4件（例：国内の心理学の査読誌では採択率はおおよそ30~40%程度と思われ、それよりも低いから。）
- ・掲載論文のインパクトが変わっていないため：2件（例：発達心理学研究の自誌引用率は高くなっていない一方、被引用回数は低くなっており、インパクトがあると評価され採択に至った論文が必ずしもインパクトがあると言えないため。）

G. 掲載不可判定への印象

質問項目1：現行の審査システムで「掲載不可」の判定を受けたことはありますか？ある場合、その審査結果は納得のいくものでしたか？



・「納得のいくものであった」または「おおむね納得のいくものであった」が24%
 ・「納得のいかないものであった」または「あまり納得のいかないものであった」が52%
 →審査結果に不満を持つ回答者が半数にのぼった

※「現行システムで「掲載不可」の判定を受けたことはない」(203名)はグラフに含めず

質問項目2：そのように考える理由についてご記入ください

納得のいくものであった理由（代表的な意見）

- ・コメントの内容が的確であり、研究や論文の改善につながったため：11件（例：原稿・研究と向き合

う契機となるような、的確なコメントをいただけたため。)

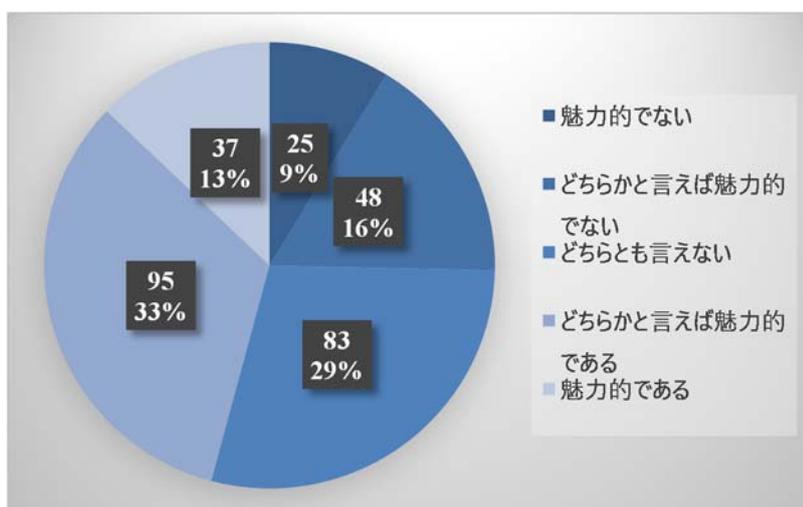
- ・コメントに沿って原稿を修正し、最終的に採択に至ったため：3件（例：最終的にパブリッシュされましたので、よかったですと思います。）

納得のいくものでなかった理由（代表的な意見）

- ・インパクトではなく欠点に基づく判断であるように感じられたため：11件（例：査読者が「インパクトはあると思うのですが…」と言っておいて、細部にこだわっている意見が列挙されていた）
- ・審査者の学問的立場や主観に基づく評価であるように感じられたため：5件（例：論文の一部に実践的な研究を取り入れたが、審査委員からは「これまでの『発達心理学研究』の論文にそぐわない」という旨の理由で掲載不可となったが、ある意味、審査委員の固定観念からの評価だったのではないかと受け止めた。）
- ・査読者によって評価基準の違いが大きいため：4件（例：査読者により評価するポイントが異なっているように思えたため）
- ・再投稿によって審査者が変わり、評価の連続性が保たれないため：4件（例：掲載不可になったのち、査読者からのコメントに従い、修正後に再投稿したところ、先の査読者の「インパクト」の捉え方とは全く逆のコメントが来るケースがあった。「インパクト」概念の理解のブレが起因していると思われる、2回目の掲載不可については納得がなかった。）
- ・審査者の指摘に誤りがあったため：3件（例：近年の統計分析において推奨される手法を用いて分析したところ、査読者からそれとは異なる、避けるべきとされる古典的な方針を打ち出された。）
- ・編集委員が適切な役割を果たしていないと思われたため：3件（例：編集委員が査読者の誤った理解に同意してしまい、それも一つの根拠として掲載不可を渡されたこともあった。）
- ・誤った指摘に基づいて掲載不可となった場合に釈明や反論の余地がないため：2件（例：不採択となった場合、再投稿の際に修正対照表を添付することができないため、誤った指摘に対する釈明や反論の余地がない。これではフェアな審査にはならない。）
- ・分量制限に対する配慮が不足していたため：2件（例：分量制限のためにレビューの範囲を絞ったところ、先行研究のレビューが不足しているという理由で掲載不可となった。）
- ・他雑誌に投稿して採択されたため：2件（例：よりレベルの高い他誌で採択されたため。）

H. 本誌の魅力

質問項目1：総合的に見て、現在の「発達心理学研究」は論文の投稿先として、魅力的だと思いますか？



・「魅力的である」または「どちらかと言えば魅力的である」が46%

・「魅力的でない」または「どちらかと言えば魅力的でない」が25%

→本誌を魅力的であると考えた回答者が比較的多かった

質問項目 2：そのように考える理由についてご記入ください

魅力的であると考え理由（代表的な意見）

- ・国内で発達心理学を代表する学会の雑誌であるため：21 件（例：発達心理学を専門とする者にとっては日本発達心理学会が発行する「発達心理学研究」に論文が掲載されることは研究者としての歩みとして大事なことだと思うから）
- ・査読の質が高いと感じられるため：13 件（例：他誌に投稿した場合に比べ、その論文のテーマに詳しい方が査読して下さる方が多いため、本質的な点でのコメントをいただくことができ、的外れなコメントが返ってくるのが相対的に少ないように思うから。）
- ・魅力的な論文が多く掲載されているため：11 件（例：我が国の発達心理学分野において、質の高い論文が報告されている雑誌であるため。）
- ・修正再審査がなく審査が速いため：8 件（例：一度の査読で採否が決定されるスピード感も有益であると感じています。）
- ・インパクト中心主義の理念が魅力的であるため：7 件（例：インパクトがあることを重要視しているという価値観は、国内誌でも独自であり重要なのではないか。）
- ・受け入れる論文の間口が広い：4 件（例：間口が広く幅広い論文を受け入れられる投稿先だと感じます。）
- ・採択率が低い分、掲載されたときの評価が高いため：4 件（例：採択率が低いということは、採択された場合、評価されたことが明確。）

魅力的でないと考え理由（代表的な意見）

- ・採択率が低く、ハードルが高いため：18 件（例：学生には、採択率が低く難しい雑誌と認知されているようで、その意味でもやや勧めにくいです。）
- ・査読の質が低いと感じられるため：13 件（例：査読者のコメントが、欧文の雑誌の reviewer のコメントと異なり、具体性が無いものが多く、特に統計分析に関わるところで理解が誤っているものもあった。）
- ・必ずしも魅力的な論文が多く掲載されていないため：10 件（例：インパクト主義という割に面白い論文が少ないと思います。）
- ・和文誌であるため：9 件（例：英文の雑誌への投稿をまず検討してしまうから。）
- ・修正再審査がないため：6 件（例：一発掲載不可となると、レビュアーと議論の上、よりよい論文を作成するという作業ができる可能性が低い。よって、他ジャーナルへの投稿を勧めている。）
- ・インパクト中心主義に基づく査読が行われていると思えないため：5 件（例：「インパクト」と呼ばれるものの内実がよく分からず、現状では掲載可・掲載不可の判断がケースによって一貫していないように思われるため。）
- ・掲載される論文の幅が狭いまたは偏りがあると思われるため：5 件（例：以前よりも、さらに発達に特化した内容に寄っているように感じる。これは雑誌の特性上好ましいことかもしれないが、近接する他領域の人間からすると魅力的ではなく、読み物としても細分化されたテーマが扱われており魅力が低下しているように感じている。）

1. 魅力を高めるための提案

質問項目：「発達心理学研究」をより魅力的な雑誌とするための提案があればご記入ください。

- ・論文の審査基準を明確化し、編集委員や審査者への周知を徹底する：15件（例：「インパクト」の具体的定義と会員および査読者間での合意。インパクト主義を続けるのであれば、査読コメントにおいてインパクトが足りないと評価する場合、インパクトを増すために必要な具体的かつ建設的な提案を必須とすること。）
- ・実践報告、資料、ショートレポートなど論文種別を増やす：14件（例：原著、資料、実践報告など投稿カテゴリーがいろいろあり、それぞれに審査基準が明示されていると投稿しやすいように思います。）
- ・社会的・実践的な意義のある論文をより多く受け入れる：7件（例：子どもの発達心理の知見が、全ての子どもが成長発達していく過程で広く役立つように、現在で言えば虐待などが増えないように子どもの人間としての存在を、提起できるといいなと思います。そのために、研究者と実践者が協力して、具体的な子どもの姿から発達の知見を共有することを進め、それを提供する雑誌になることが、今求められているように思います。）
- ・より広い領域の論文を受け入れる：7件（例：ヒト以外の動物を対象とした研究や、神経生理学系の研究など、幅広く載せてほしい。）
- ・英語論文を受け入れる、または、英文誌を新たに作る：7件（例：英文版を刊行して、よりインパクトファクターを挙げる必要があるように思われます。）
- ・依頼論文、コメント、コラム、エディトリアルなど、多様な内容を掲載する：5件（例：研究途上の経過や、コラムなどを載せたり、共同研究や発達心理学として取り組むべき研究テーマを呼び掛けるコーナーを載せたり、リアルな情報交換が出来るとよいのではないか。）
- ・審査者や編集委員の選定方法を改善する：4件（例：編集委員会の先生方、査読者の先生方の慎重な人選。もっと適切な方は数多くいる。編集委員会の知り合いの先生等に査読を頼んだり、また知り合いに編集委員をお願いするのではなく、経験はなくても、査読や編集委員会にふさわしい先生はたくさんいる。）
- ・修正再審査を復活する：4件（例：無限に修正再投稿を繰り返すことは意味がない（また論文の新鮮さを失わせる）が、レビュアーのコメントに対して、筆者に1度以上は修正の機会を設けるべきである。回数制限を設けることが望ましい。）
- ・アンケートや議論を継続して実施する：3件（例：こうしたアンケート調査を頻繁に実施したり、大会企画を実施したりすることは、意義深いと思います。）
- ・分量制限をなくす：2件（例：研究内容によっては5ページ程度が適切であることもあれば、質的研究や大規模研究など10ページでは到底収まらないこともある。一律に10ページという分量制限を設けることは研究の自由度を大幅に制約するものである。実際に国際誌では明確な分量制限がなく、内容によって判断するという雑誌が多く、合理的である。）

（次ページ以降に続く）

4. 項目間の関連性の分析

A. 項目間の相関

・回答者の属性（下表の 1～5；2章の A、C、D、F、I に対応）、インパクト評価の 3 要素の尺度得点（下表の 6～8；3章の D に対応）、本誌の査読に対する認識（下表の 9～15；3章の A、B、C、E、F、G、H に対応）の間の相関係数を算出（2～5 と 9～15 に関しては、2章・3章のグラフの凡例の上から順に、各選択肢に 1～5 の数値を割り当てた上で係数を算出）。なお、回答者の属性のうち、本誌の旧システムでの掲載論文数、査読回数、および、旧・現行システムでの編集委員経験は、現行システムでの掲載論文数および査読回数と高い相関を有したため、結果を省略する。

	1	2	3	4	5	6	7
1 年齢	-						
2 国内誌掲載論文数	.137 *	-					
3 国際誌掲載論文数	-.023	.491 **	-				
4 現行システム掲載論文数	-.103 +	.352 **	.185 **	-			
5 現行システム査読回数	.171 **	.442 **	.242 **	.292 **	-		
6 オリジナリティ	-.065	.134 *	-.038	.111 +	.085	-	
7 クオリティ	.021	.031	.092	-.091	.017	.045	-
8 社会的意義	.110 +	-.193 **	-.229 **	-.144 *	-.165 **	.185 **	.096
9 インパクト主義への賛否	-.087	-.108 +	-.205 **	.065	-.173 **	.290 **	-.182 **
10 インパクト主義の履行	.045	-.093	-.141 +	.174 *	-.023	.017	.008
11 インパクトの定義の必要性	.035	-.078	-.053	-.054	-.065	-.021	.174 **
12 修正再審査の廃止への賛否	-.019	-.100 +	-.031	.176 **	-.129 *	.166 **	.026
13 採択率の水準への印象	-.146 *	.041	.117 *	.186 **	.010	-.058	.157 **
14 掲載不可判定への印象	-.170	-.218 *	-.128	.037	-.077	.145	.133
15 発達心理学研究の魅力	-.051	-.020	-.117 *	.269 **	.028	.062	-.058

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

	8	9	10	11	12	13	14
1 年齢							
2 国内誌掲載論文数							
3 国際誌掲載論文数							
4 現行システム掲載論文数							
5 現行システム査読回数							
6 オリジナリティ							
7 クオリティ							
8 社会的意義	-						
9 インパクト主義への賛否	.159 **	-					
10 インパクト主義の履行	.148 *	.295 **	-				
11 インパクトの定義の必要性	.157 **	-.188 **	-.071	-			
12 修正再審査の廃止への賛否	.131 *	.402 **	.434 **	-.072	-		
13 採択率の水準への印象	-.147 *	-.047	.199 **	-.070	.068	-	
14 掲載不可判定への印象	-.041	.236 *	.284 **	-.131	.259 *	.468 **	-
15 発達心理学研究の魅力	.052	.297 **	.575 **	-.154 **	.334 **	.236 **	.437 **

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

B. インパクト評価の予測（重回帰分析）

- ・回答者の属性を独立変数、インパクト評価の3要素を従属変数とする重回帰分析を実施。
- ・オリジナリティ：国内誌掲載論文数が多いほど、国際誌掲載論文数が少ないほど、オリジナリティを重視。
- ・クオリティ：本誌の現行システムでの掲載論文数が少ないほど、クオリティを重視（有意傾向）。
- ・社会的意義：年齢が高いほど、国際誌掲載論文数が少ないほど、社会的意義を重視。

	オリジナリティ		クオリティ		社会的意義	
	β	SE	β	SE	β	SE
年齢	-.095	0.061	.005	0.061	.130 *	0.059
国内誌掲載論文数	.184 *	0.075	.013	0.076	-.071	0.073
国際誌掲載論文数	-.151 *	0.067	.103	0.068	-.157 *	0.066
現行システム掲載論文数	.052	0.064	-.120 +	0.065	-.047	0.063
現行システム査読回数	.041	0.067	.020	0.067	-.105	0.065
R^2	.046 *		.021		.088 **	

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

C. 本誌の査読に対する認識の予測（重回帰分析）

- ・回答者の属性およびインパクト評価の3要素を独立変数、本誌の査読に対する認識を従属変数とする重回帰分析を実施。
- ・インパクト主義への賛否：国際誌論文掲載数、本誌の現行システム査読回数が少なく、本誌の現行システム掲載論文数が多く、オリジナリティを重視し、クオリティを軽視しているほど、インパクト主義に賛成（現行システム掲載論文数は有意傾向）。
- ・インパクト主義の履行：本誌の現行システム掲載論文数が多く、社会的意義を重視しているほど、インパクト主義が履行されていると認識（社会的意義は有意傾向）。
- ・インパクトの定義の必要性：クオリティや社会的意義を重視しているほど、インパクトの定義の必要性を高く認識。
- ・修正再審査の廃止への賛否：本誌の現行システム掲載論文数が多く、国内誌掲載論文数や本誌の現行システム査読回数が少なく、オリジナリティを重視しているほど、修正再審査の廃止に賛成。

	インパクト主義への 賛否		インパクト主義の 履行		インパクトの定義の 必要性		修正再審査の 廃止への賛否	
	β	SE	β	SE	β	SE	β	SE
年齢	-.036	0.057	.085	0.076	.026	0.062	.062	0.059
国内誌掲載論文数	-.019	0.070	-.083	0.094	-.040	0.076	-.174 *	0.074
国際誌掲載論文数	-.130 *	0.063	-.106	0.084	-.015	0.069	.066	0.066
現行システム掲載論文数	.106 +	0.060	.257 **	0.076	.014	0.065	.276 **	0.062
現行システム査読回数	-.165 **	0.062	.004	0.081	-.029	0.067	-.159 *	0.065
クオリティ	-.177 **	0.055	.049	0.071	.168 **	0.059	.036	0.057
社会的意義	.083	0.058	.154 +	0.079	.132 *	0.063	.086	0.061
オリジナリティ	.281 **	0.057	-.047	0.076	-.046	0.061	.161 **	0.059
R^2	.194 **		.093 *		.057 *		.122 **	

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

- ・採択率の水準への印象：本誌の現行システム掲載論文数が多く、年齢が低く、クオリティを重視し、社会的意義を軽視しているほど、本誌の採択率の水準が高いと認識（年齢、社会的意義は有意傾向）。
- ・掲載不可判定への印象：国内誌掲載論文数が少なく、オリジナリティを重視しているほど、掲載不可判定に納得（いずれも有意傾向）。
- ・本誌の現行システム掲載論文数が多く、国際誌掲載論文数が少ないほど、本誌に投稿先としての魅力があると認識。

	採択率の水準への印象		掲載不可判定への印象		発達心理学研究の魅力	
	β	SE	β	SE	β	SE
年齢	-.106 +	0.060	-.158	0.111	-.020	0.060
国内誌掲載論文数	-.049	0.074	-.334 +	0.168	-.055	0.074
国際誌掲載論文数	.066	0.067	.003	0.139	-.134 *	0.067
現行システム掲載論文数	.199 **	0.063	.080	0.114	.314 **	0.063
現行システム査読回数	-.042	0.065	.101	0.144	.005	0.065
クオリティ	.188 **	0.058	.176	0.110	-.022	0.058
社会的意義	-.114 +	0.061	-.168	0.122	.057	0.061
オリジナリティ	-.061	0.059	.214 +	0.120	.018	0.059
R^2	.108 **		.156		.108 **	

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

(次ページ以降に続く)

5. 総括

A. インパクト中心主義への賛否

【回答の分布】

- ・インパクト中心主義に賛成の考えを持つ回答者が約7割を占めた。

【回答の理由（自由記述）】

- ・賛成の理由としては、学問の発展や社会貢献につながりやすいという意見が多数で、その他、学会としての独自性を示せる、審査が迅速化されるといった意見が見られた。
- ・反対の理由としては、インパクトの概念が曖昧で評価が主観的になりやすい、研究のクオリティが軽視されるおそれがある、地道な研究が評価されにくい、再現性問題への対応が求められている国際的な流れと逆行するといった回答があった。

【重回帰分析】

- ・国際誌論文掲載数、本誌の現行システム査読回数が少なく、本誌の現行システム掲載論文数が多く、オリジナリティを重視し、クオリティを軽視しているほど、インパクト主義に賛成（現行システム掲載論文数は有意傾向）。

【考察】

- ・会員の多くはインパクト中心主義を好意的に捉えており、学会のスタンスや特色を示す意味でもインパクト中心主義という独自性の高い理念を掲げることは意義があると考えられる。一方で、「インパクト」という多義的な概念をどう捉えるべきかについては議論の余地があることがうかがわれた。目新しさはないが堅実でクオリティの高い研究や現場での実践に貢献する研究を、インパクト中心主義の枠組みにどう組み込んでいくかが課題であると考えられる。世界的には科学研究の再現性問題が大きく取り沙汰されており、新規性や独創性に偏った審査の仕組みに異が唱えられている。また、「エビデンスに基づく実践」の理念の広がりから、研究と実践を有機的につなげる翻訳研究の重要性も認識されるようになってきている。こうした流れも踏まえて、本誌においてインパクトをどのように捉え、評価していくのかを真摯に議論していく必要があるだろう。
- ・国際誌論文掲載数の負の効果は、国際誌において、再現性問題を踏まえ、新規性よりも再現性に重点を置いた審査が意識されるようになってきていることが関係していると考えられる。本誌の現行システム査読回数の負の効果は、実際に査読を経験する中でインパクトの評価に困難を感じた審査者が多かったことを反映している可能性がある。オリジナリティの正の効果とクオリティの負の効果は、「インパクト」の概念について、研究のクオリティよりもオリジナリティを想定する研究者が多いことによるものと考えられる。上記の自由記述から得られる示唆と一致して、インパクトの概念を明確化すること、その際にクオリティの観点を組み込むことの必要性を示唆する結果と言える。

B. インパクト中心主義の履行

【回答の分布】

- ・インパクト中心主義に沿った審査が行われていると考える回答者と行われていないと考える回答者の割合がいずれも3割程度と拮抗した。

【回答の理由（自由記述）】

- ・方針に沿った審査が行われていると考える理由としては、実際にインパクトのある論文が掲載されていることや、査読を受けた際にインパクトを重視した評価が行われたことなどが挙げられた。

- ・方針に沿った審査が行われていないと考える理由としては、上記とは反対に、インパクトのある論文が掲載されていない、インパクトよりも欠点を重視した査読が行われているといった回答が見られた。また、インパクトの概念が曖昧で審査者によって評価基準が異なるという意見も多かった。

【重回帰分析】

- ・本誌の現行システム掲載論文数が多く、社会的意義を重視しているほど、インパクト主義が履行されていると認識（社会的意義は有意傾向）。

【考察】

- ・Aにおいてインパクト中心主義そのものには賛成の会員が多いことが示されたが、その理念が実際に履行されているかという点では、否定的な考えを持つ会員も多いことが明らかとなった。自由記述で見られた査読に関する意見では、方針に沿った査読が行われたという意見（10件）よりも、方針に沿わない審査が行われたという意見（17件）、あるいは、インパクトの評価基準が審査者によって異なるという意見（15件）が多く見られた。ここでもインパクトに基づく評価とはどのようなものであるか、編集委員会、審査者、投稿者の間で一定の共通理解を形成する必要性が示唆された。
- ・本誌の現行システム掲載論文数は、この項目だけでなく他の複数の項目に対する肯定的な回答とも関連しており、投稿者にとって望ましい採択という審査結果を得た経験により、本誌の審査に肯定的な見方を持つようになったことを反映していると考えられる。

C. インパクトの定義の必要性

【回答の分布】

- ・インパクトについて、より具体的な定義が必要だと考える回答者が約7割にのぼった。

【回答の理由（自由記述）】

- ・定義が必要だと考える理由として、より客観的でブレのない審査を実現するためという回答とともに、投稿者にとっても研究や投稿を行う際の指針となるという回答も多く見られた。また、独創性や新奇性という意味合いで捉えられやすいインパクトの概念について、その前提となる研究のクオリティや再現性の側面も含まれることを明確化する必要があるという意見も挙げられた。加えて、定義を明確化することで審査者の負担が軽減されるという回答も見られた。
- ・定義が必要でないとする理由としては、厳格な定義によって研究や審査の多様性が制限されるおそれがあるという意見や、定義そのものが困難と考えられるという意見が多く挙げられた。その他、研究者としての経験を積むことで自ずと適切な評価が可能になるという回答や現在の説明でも十分であるという回答も見られた。

【重回帰分析】

- ・クオリティや社会的意義を重視しているほど、インパクトの定義の必要性を高く認識。

【考察】

- ・AやBの自由記述からの示唆を裏づけるように、多くの会員がインパクトの概念の明確化を求めていることが明らかとなった。審査の客観性・公平性を高めるという審査上のメリットはもとより、あらかじめ評価基準が明確化されることで研究や論文作成がしやすくなるという投稿者側へのメリットも大きいと考えられる。これは教育評価において、評価基準を事前に学習者に伝えること自体が教育的効果をもたらすことと似ている。一方で、定義が過度に厳格であったり、一面的であったりすれば、多様な研究の発展や柔軟な審査が阻害される危険性もある。その意味で、研究のインパクトにはどのような側面があるのかを明らかにし、多様な研究の価値を包含できる「ほどよい厳格さ」の定義とは

どのようなものか、多角的な視点から議論していく必要があると考えられる。

- ・クオリティや社会的意義を重視する研究者ほど、インパクトの定義が必要であると認識していた。自由記述の回答にもあったように、インパクトという用語は漠然とオリジナリティに近い意味合いで捉えられやすいため、それ以外のクオリティや社会的意義を重視する研究者は、インパクトの定義を明確化し、クオリティや社会的意義の観点を組み込むことを望んでいるものと考えられる。

D. インパクトの評価基準

【因子分析】

- ・論文のインパクトを評価する際にどのような観点を重視するか、28項目について回答を求め、因子分析を行った結果、「オリジナリティ」、「クオリティ」、「社会的意義」の3因子が見出された。「オリジナリティ」の平均値が最も高かったが、「クオリティ」や「社会的意義」も4件法で3前後の平均値を示した。

【クラスター分析】

- ・クラスター分析の結果、「バランス」型、「クオリティ軽視」型、「学術的意義軽視」型、「社会的意義重視」型、「社会的意義軽視」型という5つのクラスターが見出され、インパクトの評価において何を重視するかは研究者によって大きく異なることが示された。

【重回帰分析】

- ・オリジナリティ：国内誌掲載論文数が多いほど、国際誌掲載論文数が少ないほど、オリジナリティを重視。
- ・クオリティ：本誌の現行システムでの掲載論文数が少ないほど、クオリティを重視（有意傾向）。
- ・社会的意義：年齢が高いほど、国際誌掲載論文数が少ないほど、社会的意義を重視。

【考察】

- ・インパクトの評価基準には、少なくともオリジナリティ、クオリティ、社会的意義という3つの要素が含まれることが示された。平均値の差から、インパクトの概念についてオリジナリティを想定する研究者が多いことが示唆されたが、他の2要素も4件法で3前後の平均値を示し、インパクトを評価する上で重要な観点として認識されていることが確認された。
- ・クラスター分析の結果から、全ての研究者が3つの観点を等しく重要視しているのではなく、研究者によって重視する観点が大きく異なることが確認された。全ての観点を平均かそれ以上に重視する「バランス」型と「社会的意義軽視」型は合わせて全体の56%であり、残りの44%はいずれかの観点を重視していないことが示された。こうした評価の重みづけの違いが、審査者と投稿者の間で生じた場合、Bの設問における「インパクト主義が履行されていない」という認識をもたらすと考えられる。また、この重みづけの違いが複数の審査者の間で生じた場合、各設問の自由記述の回答に見られた審査の主観性やブレといった認識をもたらすであろう。いずれの認識も、本誌の審査に対する不信感につながり、投稿の意欲を減退させる原因となりうる。こうした評価の重みづけの個人差という偶発的要素が審査の結果に影響することは、学問の発展にも好ましくない影響を及ぼすと考えられる。
- ・国内誌掲載論文数が多く、国際誌掲載論文数が少ないほど、オリジナリティを重視する傾向が見られた。掲載論文数という共通の指標であるにもかかわらず、国内誌と国際誌で反対の結果が見られたことは非常に興味深い。近年、再現性問題が世界的に取り沙汰され、Aの重回帰分析の結果からも示唆されたように、国際誌ではオリジナリティを強く求める風潮が減退しており、追試的研究も積極的に受け入れられるようになっている。一方、多くの国内誌では（本誌も含め）再現性問題への対応が本

格的に始まっておらず、従来型のオリジナリティを重視した審査が主流であると思われる。こうした国際誌と国内誌の評価基準の違いが、このような一見奇妙な結果を生じさせたものと推察される。本誌においても再現性問題への対応は今後の重要な検討課題である。再現性問題の議論では、探索的研究と検証的研究の区別の重要性が指摘されている。つまり、全ての研究がオリジナリティとクオリティの両方を高い水準で備えている必要はなく、オリジナリティを重視した探索的研究とクオリティを重視した検証的研究（追試含む）の双方を受け入れる枠組みを整理する必要があると考えられる。

- ・国際誌掲載論文数が少ないほど、社会的意義を重視する傾向が見られた。この負の関連は、基礎研究と応用研究のスタンスの違いを反映していると考えられる。研究内容にもよるものの、一般的に基礎研究は海外にも通じる研究成果を生み出しやすいものの、成果を直接的に実践に応用する視点は必ずしも求められない。一方、応用研究は、現場での臨床的、教育的、あるいはその他の実践をとまなうことが多いため、研究の実施に様々な種類のコストを要し、研究成果の量産にはつながりにくい。また、文化の異なる海外よりも、国内の実践者向けに成果を発信することが重要となる場合も多い。国内誌としての本誌の役割を考えれば、こうした社会的意義の高い応用研究により広く門戸を開いていくことも重要であると考えられる。

E. 修正再審査の廃止への賛否

【回答の分布】

- ・修正再審査を廃止した現行システムに賛成の回答者が約半数にのぼったが、反対意見も2割程度見られた。

【回答の理由（自由記述）】

- ・賛成の理由としては、審査が迅速化されるためという回答が最も多く、その他、投稿者自身の視点で研究を見直しやすい、意欲が維持・向上しやすい、審査者や投稿者の負担が軽減される、他の雑誌にはない特色であるといった意見が見られた。
- ・反対の理由としては、修正再審査による論文の改良の機会がなくなる、一度の審査で判断することが難しい、投稿者の意欲が低下しやすい、審査者が変わることによって審査の連続性が保たれない、審査者や編集委員会の負担が大きい、判断が不採択に偏りやすい、反論の機会がない、修正再審査は世界的に共通のシステムであるといった回答が見られた。

【重回帰分析】

- ・本誌の現行システム掲載論文数が多く、国内誌掲載論文数や本誌の現行システム査読回数が少なく、オリジナリティを重視しているほど、修正再審査の廃止に賛成。

【考察】

- ・審査の迅速化をもたらす修正再審査の廃止を好意的に受け止めている会員が多いことが示された。スピードの面だけでなく、修正再審査が多数回繰り返される中で論文が投稿者ではなく審査者のものになってしまうリスクが避けられることは、このシステムの大きなメリットと言え、本誌の特色としての意義も有していると思われる。一方で、修正再審査の廃止に反対の回答者の多くは、修正再審査を論文の改良やトレーニングの貴重な機会と捉えており、研究者によって認識が大きく異なることもうかがわれた。意欲の面についても、賛成と反対の両方にほぼ同数の意見が挙がっており、研究者によって受け止めが異なることが示唆された。また、一度で採否を決定するため判断が保守的な方向に偏りやすいこと、再投稿のたびに審査者が変わり審査の一貫性が保たれないこと、審査者の選り直しや修正箇所を確認（修正対照表がないため）をするための編集委員会の負担も大きいこと、誤った指摘

への反論の機会が著者に与えられないことは、いずれも制度上の重大な問題であり、改善の方策を議論する必要があると考えられる。

- ・オリジナリティを重視する回答者ほど修正再審査の廃止を歓迎していることが示された。オリジナリティは論文の修正によって大きく変化する側面ではないことから、修正再審査の仕組みは不要であるという見方につながっていると考えられる。一方、国内誌掲載論文数が多いほど、修正再審査の廃止に反対する傾向が見られた。修正再審査のある他の国内誌で審査を受け、採択に至った経験が、修正再審査という仕組みのポジティブな側面の認識につながったものと考えられる。また、本誌の現行システムでの査読回数が多いほど修正再審査の廃止に否定的な見方を持っているという結果は示唆的であり、自由回答の記述に見られたような、一度の審査で採否を判定することの難しさを如実に反映する結果と言える。

F. 採択率の水準への印象

【回答の分布】

- ・近年の本誌の採択率の水準（2割前後）について、低いと考える回答者が7割を占めた。

【回答の理由（自由記述）】

- ・適正であるという回答の理由の大部分は、投稿数や投稿論文の質などの情報を併せて検討する必要があるという消極的なものであり、水準そのものの妥当性を積極的に支持する意見は少数であった。
- ・採択率が低いと考える理由としては、意欲の低下や投稿数の減少につながるためという回答が最も多かった。また、インパクト中心主義を掲げながら、実際には無欠点主義に基づく評価が行われている結果ではないかという意見も多く見られた。その他、以前の水準との差、他の雑誌との差、掲載論文の質が変わっていないことなども理由として挙げられた。

【重回帰分析】

- ・本誌の現行システム掲載論文数が多く、年齢が低く、クオリティを重視し、社会的意義を軽視しているほど、本誌の採択率の水準が高いと認識（年齢、社会的意義は有意傾向）。

【考察】

- ・採択率の数値のみを提示して判断を求める質問形式に問題があったことが反省されるが、回答者の多くは国内誌の採択率として2割という水準は低いという印象を示した。多くの回答者から指摘のあった投稿数に関して言えば、現行システムの導入以降、やや増加したものの、再投稿（投稿論文の約2割を占める）を除いた数では大きな変化がなく、直近の4年では減少傾向にある。こうした推移から見て、投稿数の増加が採択率の低下をもたらしたとは考えにくく、むしろ変化の時系列的な順序から言えば、採択率の低下が投稿数の減少をもたらしているという見方もありうる。Eの自由記述の回答にもあったように、修正再審査がない現在のシステムでは、初回の審査で掲載可の判定をする際に、十分な改稿が見込める可能性について、ある種の「賭け」を余儀なくされる。もし修正採択とした論文が改稿を多数回繰り返しても掲載可能な水準に至らない場合、著者はもとより、編集委員の負担も相当に大きいものとなる。こうした「賭け」を避けるために、採否の判定が保守的な方向（掲載不可）に傾きやすいという側面は無視できない。実際に、2名の審査者で判定が掲載可と掲載不可に分かれた場合に編集委員会が掲載可の判定を行う割合は、現行システム導入直後の2010年は7割程度であったのが年々低下し、2014年以降は（全体の採択率と同程度の）2割程度にまで落ち込んでいる。採択率の低下の背景には、こうした制度上の問題に起因する保守的な判定へのバイアスの存在がある。
- ・クオリティを重視する研究者ほど、本誌の採択率の水準が高いと認識していた。クオリティを重視す

る研究者にとっては、厳格な査読によって採択率が抑えられることもやむなしという考えがあることがうかがわれる。自由記述の回答にもこうした意見は多く見られた。インパクトの概念にオリジナリティだけでなくクオリティの側面が含まれるとすれば、研究の着眼点におもしろみがあっても科学研究として一定のクオリティが保たれていなければ掲載を認められないという論理には正当性がある。しかし、上記のように、現行システムでの採択率の低下には、初回の審査で採否を判定するという制度に起因するバイアスが影響していると考えられ、必ずしも審査そのものの厳格さによって生じたものとは言えない部分がある。

- ・社会的意義を重視する研究者ほど、本誌の採択率の水準が低いと認識していた。臨床、保育・教育、育児支援などの実践に重きを置く研究者には、現在の本誌の審査は厳しすぎると認識されていることがうかがわれる。現場での実践をベースとした研究は、実践に直接貢献するエビデンスを提供するという点でインパクトが大きい、サンプリングや条件統制などの面で、実験室研究や調査研究と同等の学術的な完全性を確保することが難しい場合も多い。欠点の少なさよりもインパクトを積極的に評価するというインパクト中心主義の理念に立ち返れば、学術的なクオリティの高い研究だけでなく、こうした実践的な研究もより広く受け入れていく仕組みを整備する必要があるように思われる。

G. 掲載不可判定への印象

【回答の分布】

- ・掲載不可の判定について不満を持つ回答者が約半数を占めた。

【回答の理由（自由記述）】

- ・判定が納得のいくものであった理由としては、コメントの内容が的確であったためという回答や、コメントに沿って修正し、最終的に採択されたためという回答が見られた。
- ・判定が納得のいかないものであった理由としては、インパクトよりも欠点に基づく判断であるように感じられた、審査者の主観に基づく評価であるように思われた、審査者によって評価基準の違いが大きい、審査者の指摘に誤りがあった、編集委員が適切な役割を果たしていないなど、審査コメントの内容に対する不満が多く挙がった。また、再投稿の際に審査者が変わるため評価の連続性が保たれない、掲載不可となった際に釈明や反論の余地がない、分量制限に対する配慮がないなど、審査のシステムに関連する問題を指摘する回答もあった。

【重回帰分析】

- ・国内誌掲載論文数が少なく、オリジナリティを重視しているほど、掲載不可判定に納得（いずれも有意傾向）。

【考察】

- ・掲載不可の判定に不満を持つ回答者が約半数にのぼり、その多くが審査コメントへの疑問を理由に挙げている。これらの疑問の多くは、審査者や投稿者の間でインパクト中心主義に対する認識にバラつきが大きいことに起因すると考えられる。A～Cでも示唆されたように、評価基準について共通認識を形成することが必要であると考えられる。
- ・再投稿のたびに審査者が変わることで誤った指摘への反論の機会がないことはEでも指摘された問題であり、改善策の議論が求められる。分量制限についても、研究の多様性に配慮した仕組みを議論する必要がある。

H. 本誌の魅力

【回答の分布】

- ・論文の投稿先として、本誌を魅力的であるとする回答者が比較的多かった。

【回答の理由（自由記述）】

- ・魅力的であるとする理由としては、発達心理学領域の代表的な国内学会の雑誌であるためという回答の他、査読の質が高いと感じられるため、魅力的な論文が多く掲載されているため、修正再審査がなく審査が速いため、インパクト中心主義の理念が魅力的であるため、受け入れる論文の間口が広いこと、掲載されたときの評価が高いためといった回答があった。
- ・魅力的でないとする理由としては、採択率が低いためという回答が最も多く、他には、査読の質が低いと感じられるため、魅力的な論文があまり掲載されていないため、和文誌であるため、修正再審査がないため、インパクト中心主義に基づく査読が行われていないため、掲載論文の幅が狭いまたは偏りがあるためといった回答が見られた。

【重回帰分析】

- ・本誌の現行システム掲載論文数が多く、国際誌掲載論文数が少ないほど、本誌に投稿先としての魅力があると認識。

【考察】

- ・国内における本誌のプレゼンスを評価する回答が多く見られた一方で、和文誌であるために投稿先の選択肢に入らないという回答も少なくなかった。こうした見方は、国際誌掲載論文数が多い回答者ほど投稿先としての本誌の魅力が低く認識しているという重回帰分析の結果にも表れている。研究成果を国際的に発信することが求められる中で、和文誌である本誌が今後どのような役割を果たしていくべきなのか議論が必要である。
- ・査読の質については、高いという回答と低いという回答が同数ずつ見られた。審査者のコメント内容や投稿者の受け取りによって認識が大きく異なることが推察される。同様に、掲載論文の質、修正再審査がない審査システム、掲載される論文の間口の広さなどについても、肯定的な回答と否定的な回答がほぼ同数ずつ見られ、認識に個人差があることが示唆された。

I. 魅力を高めるための提案

【回答（自由記述）】

- ・本誌の魅力を高めるための提案として、審査基準の明確化と周知、および、論文種別（実践報告、ショートレポートなど）の細分化が最も多く挙げられた。
- ・実践的意義の高い論文、より広い領域の論文（動物研究など）、英語論文、依頼論文、コメント、エディトリアルなど、掲載される論文・記事の多様化・充実化を求める回答も多かった。また、多様な論文を受け入れるため一律の分量制限の撤廃を求める意見もあった。
- ・その他、審査に関しては、審査者や編集委員の選定方法の改善や修正再審査の復活を求める回答が複数見られた。今回のようなアンケートや大会での議論の継続的な実施を求める声もあった。

【考察】

- ・A～CやGでも見られたように、多くの会員が審査基準の明確化と周知を望んでいることが再確認された。
- ・Dで示されたように、論文のインパクトには、オリジナリティ、クオリティ、社会的意義といった多様な要素がある。必ずしも全ての研究が全ての要素を高い水準で兼ね備えている必要はなく、オリジ

ナリティを追求した探索的研究、クオリティを追求した検証的研究、社会的意義を追求した実践的研究など、多様な研究のスタイルを保証することが学問領域の発展に寄与すると考えられる。論文種別を細分化し、それぞれについて異なる評価基準を設定することは、こうした研究の多様性を保証する有効な方策の一つとなるであろう。また、これは審査者と投稿者間での評価基準の認識のズレを低減することにもつながると考えられる。

- ・掲載論文の多様化を図る上では、一律の分量制限を撤廃し、それぞれの論文の内容に応じて分量の適切性を個別に評価する仕組みを導入することも議論される必要がある。印刷のコストが懸念されるようであれば、全会員への紙媒体の配布をやめ、希望した会員にのみ配布する形とするのも一案であろう。
- ・英文誌の刊行については、第16回大会の企画「機関誌『発達心理学研究』の現在と未来」でも議論されたようであるが、現在まで実現されていない。この16年の間に、英語で論文を書く会員の数は増加しており、英語論文の審査・編集を担当できる人材を確保することも容易になってきていると考えられる。和文誌としての特色を議論するとともに、英文誌の発行についても本格的な議論が必要な時期に差し掛かっているのかもしれない。
- ・依頼論文については特集号、コメントについては意見論文、エディトリアルについては編集委員会日より、研究者間の情報交換についてはニューズレターや研究情報ニュースという形で、掲載される仕組みがすでに存在しているが、さらなる周知や活性化のための議論は必要かもしれない。
- ・審査者は、原則として事前に登録された審査者データベースから選定されているが、審査論文の領域の専門家がデータベースに登録されていないこともままある。データベースの抜本的な拡充を図るか、データベースを廃止し、全会員から審査者を選定する方式に変更するなどの方策を議論する必要があるかもしれない。編集委員は、前任の編集委員の推薦などに基づいて選定されているが、これについても研究業績や研究費の獲得状況などに基づく、より妥当な選定の仕組みを議論する余地はある。

J. 今後の論点

以上の調査結果に基づき、今後の論点を整理するとともに、たたき台としての原案を提示する。多くの回答者が挙げた意見や比較的对応が容易な項目など、議論の優先順位が高いと考えられる項目から順に配置する。

- (1) インパクトの評価基準をより明確化すべきか否か、明確化するとすればどのように定めるか。多くの会員は評価基準の明確化を望んでおり、審査の客観性や信頼性を高める上でもある程度の明確化は必須であると考えられる。しかし、インパクトの評価基準に関する認識は多様であり、少なくともオリジナリティ、クオリティ、社会的意義という3つの要素に分かれる。再現性問題の議論やエビデンスに基づく実践の理念も踏まえれば、「インパクト」の語感から想起されやすいオリジナリティのみを重視した評価は望ましくなく、クオリティや社会的意義の要素も評価基準に含めることが必要であると考えられる。
- (2) 論文種別を細分化すべきか否か、細分化するとすればどのように分けるか、種別間の序列を設けるか。論文種別を細分化することで、インパクト中心主義の本来の趣旨に沿って、多様なスタイルの研究を受け入れ、学問領域の活性化と発展を図ることが可能になると考えられる。種別としては、オリジナリティを追求した探索的研究、クオリティを追求した検証的研究、社会的意義を追求した実践的研究などが想定される。あるいは、全ての要素を一定以上の水準で兼ね備えた論文を原著とし、そ

の下位に上記の3種を位置づけるか。

- (3) 修正再審査を復活すべきか否か、復活するとすればどのような形式を取るか。修正再審査の廃止は多くの会員が支持しており、従来のような形式の修正再審査を復活することは望ましくないと考えられる。一方、初回の審査で採否を判定することの難しさから保守的な判定バイアスが生じている現状や掲載不可となった場合に投稿者に釈明や反論の余地が与えられない問題を考慮すれば、回数を一回に限定した形で修正再審査を復活することは必要であるように思われる。
- (4) 論文の分量制限を廃止すべきか否か。シンプルな仮説検証型研究であれば規定の10ページより大幅に少ないページ数、テキストの分析をとまなう質的研究や複雑な統計解析を必要とする縦断研究であれば10ページを大きく超えるページ数になることもありうる。多様な論文を受け入れ、研究の活性化を図るには、一律の分量制限は行わず、個々の論文の内容に応じて個別に分量の適切性を評価することが望ましいと考えられる。
- (5) 審査者や編集委員の選定の仕組みを見直すべきか否か、見直すとしたらどのような方法を取るか。審査者データベースの事前登録は、審査依頼へのレスポンスを高める効果は持っているように思われるが、含まれる会員数が少ないことに課題がある。全ての会員に一斉に登録を依頼し、査読つき論文の掲載数や研究費の獲得状況などを入力していただき、その情報をもとに審査者や編集委員の選定を行うといった方法は一案として考えられる。
- (6) 英文誌の発行を行うべきか、行うことは可能か。研究成果の国際的な発信がますます求められるようになってきている情勢を踏まえれば、日本を代表する発達心理学の学会として、早かれ遅かれ英文誌の発行は必要になると考えられる。英語での審査・編集を担当できる人材は以前よりも増えていると思われるが、まずは実態の把握が必要である。
- (7) 本誌は和文誌としてどのような役割を果たすべきか。松沢(2005)は、第16回大会での本誌に関するラウンドテーブルの議論を踏まえ、日本語で論文を書く意義として、1) 初心者の練習になる、2) 国内の研究者に知ってもらえる、3) 総説が日本語読者にとって有用である、4) 会員間の意見交換に適しているという4点を挙げている。1)の点で言えば、教育的な意味をもつ修正再審査は(1回に限り)復活してもよいかもしれない。2)の点については、研究者だけでなく、教師、保育士、臨床家などの実践者に知ってもらえるという意義も大きいと考えられる。その意味では(2)のように論文種別を分けるなどして、実践的研究への門戸を広げることが重要であると思われる。3)については、現在、年に1度の特集号で特定のテーマの総説を集めているが、こうした試みの回数を増やすことを検討してもよいかもしれない。4)に関して、以前は松沢(2005)のような意見論文が多く掲載されていたが、近年はめっきり掲載されなくなった。本誌がもっと気軽に研究者のつぶやきや雑感を発信し、交換できる場であってほしいと願うが、SNSが普及した現在ではやや難しい面もあるかもしれない。

引用文献

- Greenhalgh, T., Raftery, J., Hanney, S., & Glover, M. (2016). Research impact: a narrative review. *BMC medicine*, 14(1), 1-16.
- 松沢哲郎. (2005). 『発達心理学研究』を考える. 発達心理学研究, 16(3), 316-318.
- Penfield, T., Baker, M. J., Scoble, R., & Wykes, M. C. (2014). Assessment, evaluations, and definitions of research impact: A review. *Research evaluation*, 23(1), 21-32.